

サンチアゴ、南アフリカ・ヨハネスブルグなど新興玄関都市が生まれてきていること等が説明された。しかし、一旦大都市に入った国際移動者がその後農村地域に動くのか、大都市と非大都市地域との間の国際移動者の再移動については特に集計していないとのことであった。

会期中に合計7つのサイドイベントが開催され、また国連人口部オフィスで、CPDに参加した各国の人口統計専門家の情報共有会合も開かれた。

肝心の決議案は、当初から合意が危ぶまれていたが、2015年（第48回）、2017年（第50回）に引き続いて、採択が見送られることとなった。今回のテーマ「持続可能な都市、人の移動と国際人口移動」に関し、移民の権利、CPDでどこまで移民、難民、グローバルコンパクトについて議論するべきか、といった点で各国の意見がくい違った。さらに、人口と開発の文脈で恒常的に議論が生じる「性と生殖の健康と権利」で、例年通り意見の収束が見られなかった。

グテーレス国連事務総長が2017年1月に着任以来、国連改革が進められているが、決議案の非採択が続く人口開発委員会についても改革のプレッシャーは高まっている状態である。次回第52回CPDのテーマは「国際人口開発会議行動計画のレビューと評価および持続可能な開発2030アジェンダのフォローアップとレビューに対する貢献」とすでに昨年から決定されているが、議長についてはいまだ決定されていない。

会議中の配布資料、各国ステートメント、動画、プレスリリースなどは、すべて国連のウェブ(<http://www.un.org/en/development/desa/population/commission/sessions/2018/>)より閲覧・ダウンロードできる。  
(林 玲子 記)

## アメリカ人口学会2018年大会

アメリカ人口学会2018年大会 (Population Association of America 2018 Annual Meeting) が4月26～28日の日程で米国コロラド州の州都デンバーで開催された。セッション数は計251であり、分野の内訳は、「出生・家族計画・性行動・リプロダクティブヘルス」(41)、「結婚・家族・世帯」(32)、「子ども・若者」(14)、「健康・死亡」(48)、「ジェンダー・人種・民族」(10)、「移民・都市化」(26)、「経済・労働・格差」(23)、「人口・開発・環境」(13)、「人口・高齢化」(15)、「データ・分析手法」(11)、「応用人口学」(4)、「その他」(10)、「招待講演セッション」(4)であった。また、ポスターセッションが11(各80報告程度)設けられていた。本年の大会には日本からの参加者が例年と比べ少なかったが、主催者の発表によれば2,465人が大会初日に参加登録を行った。本研究所からは報告者が参加し、“Women's Employment and the Timing of First Marriage and First Childbirth in Japan: A Life Course Perspective”を報告した。また、報告者は大会開催に先立つ24～25日にIUSSP主催のトレーニング・コース“Bayesian Small Area Estimation Using Complex Survey Data: Methods and Applications”に参加する機会をえた。ワシントン大学統計学部・生物統計学部のWakefield教授らを講師に迎えたコースは米国らしく、理論に関する講義と統計解析パッケージRを用いた実演がバランスよく配置されていたのが印象的であった。ベイズ統計学及びサンプリング理論の基礎からBayesian SAEについて現在進行中及び今後の研究課題までがわずか16時間に凝縮されており、参加できたことは貴重な機会であった。  
(菅 桂太 記)